

6) ウコン=鬱金

ウコンはショウガ科の多年草で、地下には直径3~4cmの太い根茎があり、この根茎から地上に伸びる茎は高さ60~80cmに達する。葉身は先が尖った楕円形で、葉柄は長く、4~8枚が束になって出る。初秋に葉の間から長さ20cmほどの花茎を出して先に花穂をつける。花穂は緑白色で、先が淡い紫をした苞葉が鱗のように重なって、その中に黄色花が数個開く。原産地はインドで高温多湿を好み、日本でも沖縄や九州、四国南部、最近では地球温暖化で関東以西では栽培されている。和名の由来は中国名『鬱金』の呉音読みである。別称としてはキゾメグサ、ウキン、オコン、オゴン、オボンコなどが知られている。学名は『*Curcuma domestica*』で、属名は「kurekum=黄色」を表わすアラビア名、種小辞は「家庭の」という意味である。イギリスでは『turmeric』、フランスでは『curcuma』、中国では前述のごとく『鬱金』である。

鬱金が日本に渡来したのは江戸時代の享保年間(1716~1736年)のこととされ、もっぱら染料または薬としてであった。根茎を掘り挙げてから皮を剥いて5~6時間煮て乾かし、粉末にしたものが英国名の由来でもある『ターメリック』という香辛料である。これは鮮やかな橙黄色をしており、この黄色系色素は属名にもなっている『クルクミン』(curcumin)と呼ばれるもので、カレー粉の主原料の一つになっている。ターメリックはバターやチーズ、沢庵漬けなどの染色にも用いられている。またクルクミンは胆嚢の活動を促進し、肝臓の解毒作用を助けることでも知られている。漢方では鬱金の根茎を干したものを『薑黄』(キョウオウ)といい、鼻血、吐血の血止めに内服し、皮膚病や膿腫の塗り薬とされている。この他にも利胆、健胃、強壮にも用いられ、生の根茎をすりおろしたものは切り傷、痔に効くといわれている。

鬱金は特殊な匂いを出すことから鬱金で染めた布には、虫が付かないといわれており、風呂敷として、書画や骨董品などを包むのに用いられた。江戸時代前期には『小袖雛型本』(コソデヒナガタボン)に「地うこん」と記されたものが多く、当時は相当に流行したらしい。特に無毒なことから布帛や食品を染めるのに重用され、木綿に染めたものは嬰兒の産着に用いられていた。また鬱金粉は水によく溶けて取り扱いが容易だったために、染料としての価値は非常に高く、特に酸、灰汁(アク)、鉄、明礬(ミョウバン)などを用いて、種々色相の異なった美しい黄色を染め出すことから、江戸時代以降、化学染料が開発されるまで幅広く用いられた。ただ鬱金は光線に対する耐久性はなく、緋色を出すために紅の下染めなどとして用いられることも多かった。インドでは鬱金は邪悪なものを寄せつけない力があると考えられており、ヒンドゥー教の儀式などでは不可欠なものとされ尊ばれている。

ウコンの栽培は難しいものではないが、耐寒性が低いので秋には掘り挙げて、乾燥させないようにして、暖かいところに保存する。翌春、霜が降りないようにしてから植え込むのだが、最近では関東地方などでも一年草として栽培されている。



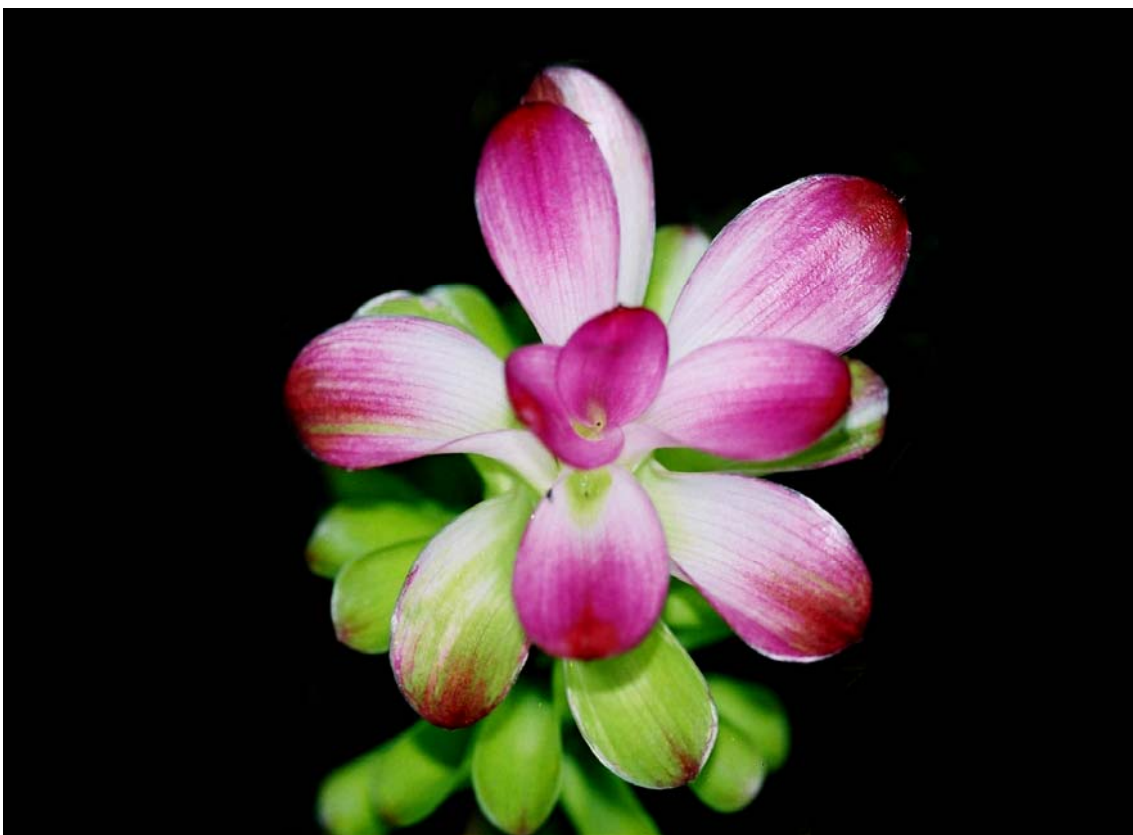
ウコンの花穂、黄色いのが花である(東京都小平市薬用植物園)。



ウコンの花穂、まだ花は咲いていない(東京都小平市薬用植物園)。



ウコンの根塊、カンナノ根やショウガノ根に似ている。



同属で紅花種の『莪朮(ガシヅ)』(東京都小平市薬用植物園)。



根塊も葉もどこかカンナに似ている(さいたま市緑区)。

[目次に戻る](#)